

一一・市河米庵書軸

解説

市河米庵は江戸後期の書家。八号史料の巻菱湖・貫名海屋と並んで「幕末の三筆」と称された。安永八年（一七七九）、儒者・詩人である寛斎の子として江戸に生まれた。名は三亥、字は孔陽または小春・米庵と号し、別号に榮斎・顛道人・金洞山人・半千筆斎・百筆斎・小山林堂と称した。父の寛斎・林述斎・柴野栗山に学び、書は父の他、中国の顔真卿らの書風を学んだ。著書に『書訣』『米庵墨談』『筆譜』『書画題跋』『五体墨場必携』『小山林堂書画文房図録』など、書学者の今もって有益な書が多い。渡辺華山・頼山陽らと交友があり、華山の描いた米庵画像は有名。安政五年（一八五八）、コレラで没した。なお後漢の王充『論衡』に「急行無善歩、捉住少和聲」とあるとのことであり、「促柱」は「捉住」の誤か。